

声とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

1. 分担者

城 戸 淳
先 田 進
鈴 木 孝 庸
廣 部 俊 也
藤 石 貴 代
佐々木 充
金 山 亮 太
高 橋 康 浩
金 子 一 郎
木 村 豊
村 上 吉 男
平 野 幸 彦
斎 藤 陽 一
桑 原 聡
番 場 俊
橋 谷 英 子
鈴 木 正 美

2. 2008年度の研究活動の概要

(1) シンポジウムの共催

第3回国際シンポジウム「19世紀の再評価－19世紀の可能性－」

開催日：2008年10月4日(土)・5日(日)

エリック・ブノワ（ボルドー第三大学／フランス）「フランス19世紀とモデ

ルニテ：自己－評価，低評価，再評価」

ドミニク・ジャラセ（ボルドー第三大学／フランス）「複数の19世紀，諸芸術の再評価とモデルニテの議論」

佐々木充（新潟大学）「『シェイクスピアはロマン派？— 19世紀前半におけるシェイクスピア—」

(2) プロジェクト主催シンポジウム

基調講演 工藤進（明治学院大学）「『失われた時を求めて』の〈声〉」

司会 番場 俊

1) 発表者 鈴木孝庸氏（新潟大学人文学部）

「平曲の秘曲におけるテキストと音楽」

2) 発表者 廣部俊也氏（新潟大学人文学部）

「断本と見立遊び」

3) 発表者 先田 進氏（新潟大学人文学部）

「『金閣寺』における見ることと聴くこと」

4) 発表者 佐々木充氏（新潟大学人文学部）

「批評の声と学問の声—小林秀雄と吉川幸次郎」

3. 2008年度の研究成果の概要

「人文科学研究」第122輯への掲載（平成21年3月刊行）

プロジェクト特集「声とテキスト論」

高木 裕 「特集にあたって」

鈴木孝庸 「祇園精舎語りの秘曲性」

廣部 俊也 「行為としての『見立』」

先田 進 「『金閣寺』における《視覚》から《聴覚》への移行」

高木 裕 「ネルヴァルの抒情の探究と〈声〉」

4. 2008年度の研究成果の一覧

(1) 雑誌論文

鈴木 孝庸，「平曲〈読物〉のテキストと墨譜」新潟大学「人文科学研究」，第

122輯, 2008年7月, pp.1-31

鈴木 孝庸, 「祇園精舎語りの秘曲性」, 人文科学研究 (新潟大学), 第124輯, 2008年, pp.1-48頁

高木 裕, ネルヴァルの抒情の探究と〈声〉, 人文科学研究 (新潟大学), 第124輯, 2008年, pp.5-21

佐々木 充, 「シェイクスピアはロマン派?— 19世紀前半におけるシェイクスピア—」, 『19世紀学研究』, 第3号, 2009年, 103-118頁

佐々木 充, 「小林秀雄の近代批評—誤訳とずらしの手法について—」, 人文科学研究 (新潟大学), 第124輯, 2008年, 75-104頁

(2) 学会発表

佐々木 充, 「シェイクスピアはロマン派?— 19世紀前半におけるシェイクスピア—」, 19世紀学研究所第3回国際シンポジウム, 2008年10月4日, 新潟大学

佐々木 充 「批評の声と学問の声—小林秀雄と吉川幸次郎—」, シンポジウム「声とテキスト論」, 2009年3月21日, 新潟大学

(3) 図書

鈴木孝庸, 勉誠出版, 「腰越状作文まで」小林保治監修『中世文学の回廊』

鈴木孝庸・楊夫高, 高志書院, 『平家物語と不思議』

番場俊, 東北大学出版会, 栗原隆 (編) 『人文学の生まれるところ』「表象文化論——イメージ／テキスト／身体 of 夢」(91-108頁)

平野幸彦, 東北大学出版会, 「英米文学——なぜいまどき文学なのか」, 栗原隆 (編) 『人文学の生まれるところ』